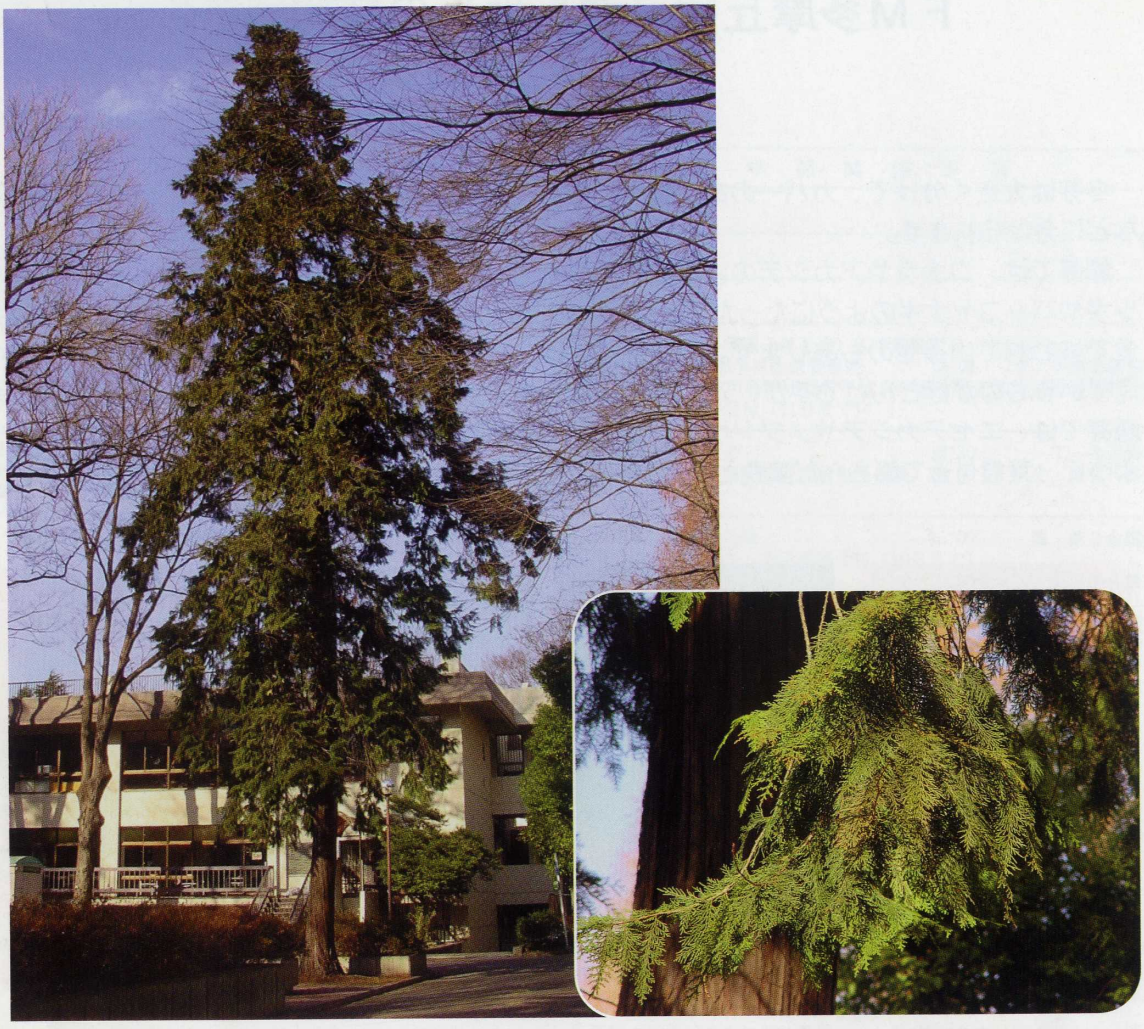
農工大の樹　その39



〈解　説〉

ヒノキ

（ヒノキ科、ヒノキ属の種、学名：*Chamaecyparis obtusa* Endlieher）（漢字：桧）

この木は、造林地や庭園にごく普通に見られる常緑針葉高木ですが、外国には生育しない日本の固有種です。分布域は、福島県以西の本州(主として太平洋側)、四国、九州(屋久島まで)で、生育の最高地点は、北アルプスの燕岳、海抜2,200mと言われています。成長して大木になると樹高30m、直径1mに達し、枝が密生し、梢が丸くなります。葉は、鱗片状で、対生に枝に張り付いているので葉らしく見えませんが、先が丸く、裏側にはY字状に白い気孔溝があります。和名のヒノキは、「火の木」の意味で、この木を用いて火をおこしたことに由来します。伊勢神宮では、今でも神事に用いる火は、この方法で採っているそうです。我が国では、この種の漢字に「桧」を充てますが、これは日本独自のもので、この種が分布しない中国では「桧」は「イブキ」を指します。この木は、古来より建築用材として利用され、樹皮は、檜皮葺の材料として使われてきました。また、仏像には、飛鳥時代のクスノキに替わって、天平時代以降は、この材で作られるようになりました。以前よりカジネンを主成分とする香油が採られてきましたが、最近では、揮発成分のヒノキチオールの様々な効用が注目されています。よく似た種にサワラがあります。しかし、その種が隙間の多い円錐形の樹形を成し、葉の先が尖り、白い気孔溝がX字状であることで区別できます。

（農学部教授　　福　嶋　　司）